

## 学会印象記

### 瀬戸際のアジア、崖淵の日本

沢田 貴志

Takashi SAWADA

港町診療所

#### ■神戸に ICAAP がやってきた

2003年に新型肺炎 SARS を理由に一度は延期された第7回アジア太平洋地域エイズ国際会議。背水の陣で準備にあたった組織委員にとっては、どれだけの参加者が集まるのか不安を抱えての開催であった。赤字が出れば組織委員が負債を頭割りして返済しなければならないという危惧が頭をかすめる中で、直前まで資金繰りに走り回った委員も少なくなかった。

しかし、蓋を開けてみると開会式は大勢の立ち見が出るほどの大盛況となり、会議参加者総数も3,116人と予測を大きく上回ったという。開会式の中で特に聴衆をひきつけたのは、Seven Sisters<sup>1)</sup>を代表してスピーチを行った Frica Iskandar さんである<sup>2)</sup>。Frica さんは、HIV に感染して生活している20代の女性として、社会に差別される危険を冒しながら壇上に上がることを引き受けた。その理由を彼女は、「自分が人間として生きるため」「勇気を振り絞って闘うことを選んだ」と語った。さらに壇上に立ち連帯を訴えることは「自分達 (HIV 陽性者) の役割を変えるために」行っているのだという。この4年間のアジア太平洋のエイズを巡る変化が凝縮されていたように思う。

3大感染症に対する取り組みを進めるために結成された世界エイズ結核マラリア対策基金は、予防を推進するためにもケアの普及が必要とし途上国の包括的なプログラムに資金の提供を行ってきた。これに応えるかのように世界保健機構 (WHO) も3 by 5プログラムによって技術的な支援を強化した。しかし現実には、途上国の HIV 医療の普及は困難であり、今回の会議で WHO も300万人に ARV (抗レトロウイルス剤) を提供するという目標が達成されず100万人に留まっていることを明らかにした。過去1年ほどのうちに急速に ARV へのアクセスが拡大したが残念ながら進展の大きく見られた地域とほとんど進まなかった地域との格差が生じている。最も医療へのアクセスが進んだタイでは保健医療の基礎的なシステムが整備されていたことと同時に HIV 陽性者の自助組織が大きな役割を果たしたともいわれている。「自分達の役割を変えるために (壇上に上がった)」という言葉は、自分達こそが ARV のアクセ

スを拡大し、地域のエイズ対策に貢献するという自負に満ちたものであり、その覚悟を表明したものである。

#### ■岐路に立つアジア

会議に先立って発表された UNAIDS のレポートによれば、アジアは現在大きな分岐点にあるという。もしこのまま現在の政策を続けていけば、あと5年以内に1,200万人規模の新規感染者を生み、経済・社会に大きな影響を生むことになる。しかしもう一つの選択肢として、今直ちに政策的にも資金的にも思い切った対策を進めれば、これによって今後5年間に新たに感染する人の数を半減させることができ、将来必要な人材や資金の量を大きく減らすことができるというのである。今すぐに必要な対策をしなければ、将来大きなつげを払うことになるのだ。

今後アジア太平洋地域がアフリカを抜いて世界の HIV 感染のもっとも大きな中心となることは誰もが疑わないことである。薬物使用者・性産業従事者・男性同性愛者・移住労働者といった感染の危険にさらされやすい人々 (vulnerable population) に対する積極的な支援が政策的に実施されていない多くのアジアの国々では、タイで10数年前に生じた一般人口を含めた爆発的な流行がまさに今起きようとしている。HIV の感染にさらされやすい人々に対して、感染から身を守ること、そしてすでに感染した人々の生活の質を守りともにウイルスと闘う環境を醸成することを優先させた実効的な対策を行うことが必要である。UNAIDS は、こうした状況を変えていくために必要なこととしてレポートの中で三つの提言をしている。1) 各国政府が HIV/AIDS を優先順位の高い課題として位置付ける、2) 予防とケアを含めた包括的なプログラムを、影響を受けやすい人々を中心に進める、3) 市民社会の参加を促進するメカニズムを整える。こうした提言に加え、開会式で ASAP (アジア太平洋エイズ学会) を代表して挨拶にたった Denis Altman 教授も、エイズによってもっとも影響を受けた人々に政策策定に参加してもらうことが有効な対策につながることを強調していた。Seven Sisters が ICAAP の共催者となり、ICAAP の国際諮問委員会に名前を連ねた理由がここにある。

## ■薬物防止より清潔な注射器が優先

今回の会議で特に注目をあつめたプログラムに **Harm Reduction Program** がある。これは、放置すれば感染のリスクが極めて高い経静脈薬物使用者 (**IVDU**) に対して、清潔な注射器と針を提供することで **HIV** の感染のリスクを減少させることを薬物からの離脱に優先して取り組もうというプログラムである。オランダ・オーストラリアなど欧米諸国で効果をあげ、**AIDS** 対策プログラムの重要な柱の一つとなっているが、アジア太平洋地域では「薬物使用を容認するメッセージになるのでは」という抵抗感から導入されることがあまりなかった。マレーシア・ベトナム・中国といった国々を始め多くのアジア太平洋地域の国々でも経静脈薬物使用者の間での流行に引き続き他の人口集団でのより大きな流行へつながっていることが指摘され、**AIDS** 対策の重要な構成要素であるとの認識が **UNAIDS** などを中心に広がってきていた。

こうした中で昨年バンコクで行われた世界エイズ会議の開会式の演説でタイのタクシン首相が政策を大きく転換し **Harm Reduction Program** をタイ国内でも導入することを表明し、今年もマレーシアでの導入が決まった。コンドームの使用や薬物使用に対して非寛容であることが多いとされるイスラム教国で **Harm Reduction Program** が表明されたことは大きな前進である。

## ■存在感を増した感染者運動

2001年のメルボルン会議に比べてもう一つの大きな違いは、前述した **Frica** さんのスピーチにも見られたように **HIV** に感染した当事者の取り組みである **HIV** 陽性者団体の活動の枠組みが大きく広がったことである。前回の **ICAAP** では、感染者団体の活動は豪州とシンガポール・マレーシアなどの英語圏の国々での活動が目立ち内容も差別を取り除くためのアドボカシー的な活動が目立った。しかし、今回の会議では医療のアクセスの乏しかった開発途上国の感染者達がケアや治療の拡大を求めてより広範なネットワークを作って声をあげることが目立っていた。治療へのアクセスを求める具体的な手法を論議するワークショップはどこも満員の盛況であった。**ARV**<sup>3)</sup> へのアクセスについてはその期待感と共に難しさも理解されてきており、関心が特に高かった。「**AIDS** と **ART**」というテーマのタイの芸術家主催のワークショップにまで、**ART** を **anti-retroviral treatment** の略だと思い込んだラオス人の医師が迷い込むというハプニングすらあった。もっとも幸いなことに、この医師は最後までワークショップに参加し、啓発活動における **ART** (芸術) の意義を感じて満足してくれていた。

## ■国境を越える若者達の活動

今回の会議で大きな成長を見せてくれたのは、若者達のネットワークであった。前回のメルボルンの会議では、初めてユースフォーラムが実施され、当事者である若者自身に声をあげる機会を提供することの重要性が強く認識された。これをうけて日本のなかで若者の啓発活動を行う **NGO** の若者達や、ボランティア、学生達を中心に実行委員会が形成され、2003年の日本エイズ学会、2004年のバンコクでの世界エイズ会議などの機会を活用してネットワークを広げていった。そして今回アジア太平洋地域の若者達と共にユースフォーラムを実現することができ国際フォーラム、国内フォーラム、「カフェ」の三つのプログラムが実施された。国際フォーラムでは、自身ブータン難民として難民キャンプでエイズなどの啓発を行っているネパール在住の女性、**MSM** のコミュニティの中で実践的な啓発に取り組むインドネシアの若者がピアエデュケーションの重要性について語った。また、薬物使用による感染の多いインドの **NGO** のスタッフ、カンボジアで行政と連携して全国で啓発を展開する団体の代表といったさまざまな若者が現場の実体験について語ってくれ、日本からもブラジルやウガンダでの **NGO** 活動に参加した若者が発表を行った。日本の若者達も国内フォーラムで自分達のエイズとの関わりについて語り互いの思いを知りモチベーションを高めていた。更に啓発活動の実践例がカフェ企画で一般市民にも公開され好評を博していた。閉会式ではこうした若者自身の参加を次回のコロomboの会議でも保証するようにと実行委員会代表の力強いアピールがなされた。

## ■性教育

日本の参加者にとっての一つの大きな関心事に、アジアの各国が性教育にどのように取り組んでいるかということがあった。7月3日の夜に行われた日本性教育協会の主催のサテライトシンポジウムは、まさにこうした関心にこたえる物であった。「げんき、やるき、ほんき：アジアに学ぶエイズ・性教育」と題されたこのシンポジウムでは、フィリピンとタイでの性教育の取り組みが紹介された。いずれも、当事者である若者が実際に参加することで、性について具体的な情報を若者自身が得られ、自分の体を自分自身で守れるように **empower** していくといった点が共通していた。

## ■新たなネットワーク

開会式で繰り返し訴えられた、「より広範な市民社会の連携でエイズ対策を進めるべき」というメッセージに応えるかのように、いくつかの新たなネットワークの広がりが

今回の ICAAP で試みられた。これまでも ICAAP では陽性者団体や NGO など市民社会からの参加者が互いにネットワークを広げたり、会議を有効利用できるような情報交換をする場としてコミュニティフォーラムが実施されている。今年のコミュニティフォーラムは会場があふれるほどの盛況であったが、特記すべき事柄としては、労働組合・宗教者という二つのあらたなテーマで小グループ討論が行われて国内国外を含めて多数の参加者が熱い討論を行ったことがある。また内外の NGO のネットワークが結核研究所と共にエイズ予防財団に協力し「アジア太平洋の人口移動と HIV」というサテライトシンポジウムが開催された。これは会議のテーマ“Bridging Science & Community”の一つの実践例ともいえる。

## ■企業とエイズ

国際協力銀行の主催で行われた別のサテライトシンポジウムでは、同行の融資で行われたカンボジアの港湾建設事業とタイラオス国境の第二メコン川橋の建設において、周辺地域の HIV 流行を防ぐための対策を積極的に行ったことを報告した。このなかでアジアビジネスエイズ連盟の Anthony Pramualratana 氏は、エイズ対策に企業が積極的に取り組み予防のみならずプライバシーの保持や感染した従業員へのケアの向上に努めることは、企業の優秀な人材と生産性を守り、地域社会からの企業への信頼を守る優れた経営戦略なのだと話した。このようにすでに企業活動とエイズ対策は密接な関係を持っている。7月1日には欧米に本拠地を持つ三つの企業が合同で企業の社会貢献に関するセッションを持った。その主催者の一人である Mark Devadason 氏は海外に進出する日本企業に融資をする銀行の立場から、海外で事業を失敗させないためには適切なエイズへの対応が不可欠であると指摘していた。

## ■日本とアジアのエイズ

当初は日本での知名度の少なかった ICAAP も開催されてみると関西の新聞では連日大きく取り上げられ、日本語で実施したワークショップもいずれも満席になり好評であった。しかし、海外の参加者からは「首相が ICAAP の前日に世界エイズ結核マラリア対策基金に 5 億米ドルの資金拠出を約束しておきながらなぜ ICAAP には来なかったの

だろう。ICAAP の会場に来て数千人の海外参加者や国連機関を前に発表したほうが効果的だったのに。」と訝しがる意見が少なからず聞かれた。代わりに出席するはずだった厚生労働大臣までもが多忙を理由に突然欠席したのだから不思議に思われても当然である。私たちの組織委員の力不足で ICAAP の重要性が政府首脳に届かなかったのだろうか。「日本の官僚は優秀だからそんなはずはない。市民社会の参加を重視し、vulnerable population をエイズから守るための政策の推進を求める ICAAP のメッセージに日本の政策決定者が抵抗感を持っているからではないか。」と欧州出身のある参加者は言った。もし本当にそうだとすれば、今後日本のエイズ政策は極めて前途多難である。

日本の製造業の重要な拠点でありまた世界最大の市場となる中国では、有効な対策をとらなければ 2030 年に男性人口の 5% が感染するとの予測がされている。中国政府も積極的なエイズ対策を進める方針に転換した。日本の社会がエイズへの適切な対応を理解し実践しなければ日系企業は中国で批判を浴び諸外国の企業との競争力を失っていくだろう。やがてそれが日本政府の税収の低下になり、ますますエイズ対策がしぼんでいくという悪循環にはまるのではないか。デフレスパイラルならぬエイズ危機スパイラルといった状態で日本の経済はしぼんでいこう。今エイズ対策に積極的な投資をしなければ、エイズで失敗して滅んだ経済大国として日本は後世に名を残してしまうのではないだろうか。

注 1) アジア太平洋地域でエイズに取り組む団体や vulnerable Community の当事者団体のネットワーク。ASAP (AIDS Society Asia Pacific), APCASO (Asia Pacific Council of AIDS Service Organizations), APN+ (Asia-Pacific Network of People living with HIV/AIDS), APNSW (Asia Pacific Network of Sex Workers), AHRN (Asian Harm Reduction Network), AP Rainbow, CARAM-Asia の 7 つのネットワークが含まれる。

注 2) AIDS & Society 研究会議 HAT Project に全文が掲載 ([http://asajp.at.webry.info/200507/article\\_2.html](http://asajp.at.webry.info/200507/article_2.html))

注 3) antiretroviral 抗レトロウイルス剤は ARV と略されることが多い。